

# 体育科専門スキー実習の理念

網 豊作\*・藤江善一郎\*・酒井志郎\*  
佐野 裕\*・落合 優\*・蝶間林利男\*

## The Idea of Ski-training in University as Major in Physical Education

Toyosaku AMI, Zenichiro FUJIE, Shiro SAKAI, Hitoshi SANO,  
Masaru OCHIAI and Toshio CHOMABAYASHI

### ABSTRACT

The specificity of mankind's swift development, inevitably gives rise to certain general reflections about the natural environment. Especially scientific and technological revolution in capitalism is able to destroy whole nature. Today, imperative need for environmental protection, the possibility of some vital natural resources becoming exhausted and other phenomena give added urgency to questions concerning life on earth and the destiny of material and spiritual culture.

We believe that ski-training in university is expected to open student's eye to wonderful nature away from unnatural ski-gelände. However, almost all the Japanese skiers, more than 10 million people and many sky-training courses in university enjoy Alpine ski on the unnatural limited gélende. They only take just ski-lift and slide down the slope without any dialogue with nature.

In the above-mentioned the ski population increase rapidly with a lot of problem. We assert ski-training in university should be deeply penetrated with „Zeit Geist.“

“Ski-touring is the ski sports that needs not lifts, no ski areas and causes no change to the ECOLOGY.” (F. Mattisich: Ski-touring—parks & recreation, 1972. 11, p. 16)

### 1. はじめに

ギ・ビオラによれば、環境問題は「国家独占資本主義と社会の危機との結節点であり、環境破壊における犯罪性が明白であるが故に、公害についての民衆の自覚は、必然的に資本制社会の基礎それ自体、剰余法則それ自体を問うことにならざるを得ない<sup>1)</sup>」と分析している。それだけに環境汚染問題は激しい思想闘争、政治闘争の舞台となり、自然と人間とのかかわりをめぐる問題は活発化している<sup>2)</sup>。

大自然を舞台に展開される野外活動が、こうした問題と無関係に存立し得ないことは当然である。

---

\* 保健体育教室 (Dept. of Health and Physical Education)

「生まれたままの生きた自然、はだして芝生をかければ、いつのまにか足の裏はみどり色……。休日、自然の中でのんびり人間回復！ 大自然の中でロジアル」。こうした広告文にみるまでもなく、確かに自然は今、再び流行している<sup>8)</sup>。

ところで、野外運動とは、流動的な自然環境の中で、自然と対峙してその運動課題を克服するスポーツ活動の総称であるが、その主要な性格は競技スポーツとは異なり、タイムとか技術を競って勝敗を争うものではなく、自然との触れあいを追求する思想と態度を尊重するものである<sup>9)</sup>。しかし、たとえば「サファリパークの虚偽<sup>10)</sup>」に象徴されるように、「自然」は今、利潤追求の対象として矮小化されており、その「自然の体験」は歪曲されている。今日の野外活動においては、自然との真の対話が極めて稀薄になってきているといえよう。アラスカ・カナダ等での大自然を求めての各種キャンピングツアーをみても、また日本固有の自然の見直しやその掘りおこしの問題に関しても、その「自然の価値」は、まさにその「商品価値」によってのみはかれるかの様相にある。

野外活動の指導者が、こうした風潮に安易にもたれかかり、利潤追求の手助けにその専門性を切り売りすれば、野外活動の営利事業への密着は救い難いものとなり、その寄性的性格が、野外活動で何が大切なのかを見失なわせ、いつかは野外活動のフィールドである「自然」を喰い潰すことにもなりかねないといえる。それだけにこの領域で、活動する機会の多い教育学部体育専修生を対象とした「専門スキー実習」の在り方が、自然と人間という問題視角から、その実践上の理論的背景やプログラムの妥当性について論議されなければならないのも、一つの時代的要請といえる。勿論、このことは体育科教育の独自の目的を曖昧なものにし、「スキー実習」を自然保護教育や環境教育<sup>11)</sup>の領域に解消し、その従属物に転化させることを意味するものではない。それは体育科教育の性格を「身体活動を通しての教育」とする「手段説」と同様、筆者らの批判するところである<sup>12)</sup>。問題は、今日のスキー産業主導型スキーの在り方とは異って、大自然の中でスキーの楽しさを徹底的に追求することが、野外活動としての本質規定に欠かせない自然との *begegnung* に矛盾しない、スキー本来の在り方を明確にすることにある。

こうしてみると、「スキー実習」を野外運動という観点から如何に把握するかが、その教育実践上の重要な理論的分岐点になることが理解される。しかし一般的には、野外活動の理念に無理解であったり、あるいはまた、野外運動としてのスキーという位置づけを曖昧にしたままの、課題意識の不鮮明な「大学スキー実習」も少なくなく、その多くは回転一辺倒の、所謂「アルペン型<sup>13)</sup>」スキー技術の習得にその「目的」が引き寄せられ、それも極めて技術主義的に偏向するために、自然との出会いが稀薄となり、それが今日のスキー公害として喋々される「ゲレンデスキー<sup>14)</sup>」の問題点とも重なって、大学スキー実習の在り方が問われることにもなっている。

「専門スキー実習」は、体育専修生の体育・スポーツに関する専門的力量を高めるためのカリキュラムの一つとして位置づけられ、本学では冬季野外運動の一科目として実施される学外集中授業の一つである。それでは教育学部・体育専修生の体育・スポーツに関する専門的力量とはなにか。勿論、小学校教師として期待される専門的力量と、体育教師

としてのそれらとは必ずしも重なりあうものではなく、専門的力量をどう把えるかは論者によって異なるが<sup>10)</sup>、体育科の領域では、専修生には次の様な諸能力の獲得が期待される、と筆者らは考えている。

- (1) 体育・スポーツ関連諸科学を系統的に学ぶ中で獲得される専門的学問研究能力
- (2) 専門体育実技や自主的活動によって獲得される、一般的、普遍的な身体制御能力と、ある特定分野の専門的な高度体育・スポーツ技術
- (3) 高い教育的教養と豊かな教材解釈の中で、学習者のこころとからだの発育、発達を援助し、体育・スポーツにおける「主体者<sup>11)</sup>」形成をはかれる教授学的力量と組織的力量

以上の如く、ここではそれらを三つのアスペクトから把えておきたい。

本稿は、とかく一つの行事としてマンネリズムと化し、問題意識が稀薄となりがちな「スキー実習」に関して、「専門教育」という観点からその「在り方」を求めて、試行錯誤をくりかえしてきたその理論的整理である。「継続は力なり」というが、先行実践の批判的検討を抜きにして如何なる実践の積み重ねも生れない。本学の今後の「専門スキー実習」は、本稿の立場、実践上の理論的背景やそのプログラムの実際について、理念的にはもちろん実践的にも、その「批判的検討」を踏まえて、その「前進」が語られることが期待される。

#### 注

- 1) ギ・ビオラ、金田重喜訳「マルクス主義と環境問題」青木書店。
- 2) 資本主義的生産方法とその技術では、生産による自然環境の攪乱、自然環境汚染の回復は、自然の自浄作用(再生力)にゆだねるという行きかたが当然とされていた。(井上晴丸「社会と生活」『科学と思想』1971. 7, No. 1 所収)しかし、人間の諸活動が超一級自然力となった今日、従来の掠奪的な自然利用は一つの犯罪でもある。(渋谷寿夫「現代環境論の一考察——生態学とその人間的側面」『科学と思想』1978. 10, No. 30 所収)従って、開発の論理と保全の論理が科学的に明らかにされなければならないといえるが、(三村浩史『科学と思想』No. 1, p. 27-44)それはいたずらに原始的自然生活の讃歌に道を開くものではない。
- 3) ロレンツ・ストウツキ、金森誠也他訳「余暇社会の再検討」サイマル出版会 p. 211。  
勿論、自然概念は多義多様な外延と内包をもつ。たとえば雑誌「科学」1979.10、「唯物論」1979.5および11号、「伝統と現代」通巻第35号、「科学と思想」No. 8等々と、自然が特集テーマとしてクローズアップされている。これらにみるようにその思想的立場や専門領域によって、自然の意味するところは多様であるが、一般的には「緑の自然」にその表徴は集約されよう。神奈川新聞社「緑のヨーロッパ」合同出版、読売新聞取材班「緑と人間」築地書館。「ジュリスト」No. 492。
- 4) 野外活動、野外運動、野外教育の概念、術語上の身分関係については、佐野 裕「野外活動における自然意識」『横国大教育紀要』No. 14, p. 50-66 を批判的に参照されたい。尚、「自然活動」なる用語もあるが、(塚本瑠一『自然活動学のすすめ』岳書房)その検討は別の機会に譲る。
- 5) 前出 3) 所収「レジャーに荒廃する自然」p. 130-141 は具体的資料をもとにした興味深いレポートとなっている。
- 6) 小川 潔「自然保護教育の現状」『科学』1979. No. 10. p. 675-679 所収。しかし、自然破壊を導くスポーツ、レジャーの在り方は厳しく排除されなければならない。
- 7) 「身体活動を通しての教育」という立場に対する批判的見解は、既に「教育科学研究会・身体

と教育部会」や「学校体育同志会」の諸論文に明らかにされている。たとえば中森孜郎「体育教科の本質と課題」『現代教育学 14 身体と教育』岩波講座 1962. p. 177-189 所収, 同「身体形成の理論」『講座現代民主主義教育 3 民主教育の基礎理論』青木書店 1969. p. 105-126 所収, 同「子どもの発達とからだの教育」青木書店 1977. p. 21-33 等に詳しいが、「身体活動を通しての教育」という体育観とその交通整理は、岸本 肇「体育のねらいに関する一考察」『神戸大学教育学部研究集録』1977, p. 25-42 に譲りたい。

- 8) それは「一般的な欠点として、日本のスキーヤーの 90% までが練習場ですべっている。残りの 10% ぐらいが練習場をはなれてツアーをするのではないだろうか。基本的な動作ができるようになったら一日も早く自然の山野にでるべきだ。日本のスキーヤーは練習場にへばりつきすぎる」という Hannes・schneider (1890~1955) の批判のように、矮少化されたアルペンスキーの在り方を意味しているのであり、(福岡孝行「来朝外人スキーヤーの足跡」『日本のスキー』実業之日本社所収 p. 54) ここでの用法は、そうしたスキーの在り方に無批判的に追従している「大学スキー実習の在り方」を表象するものである。  
佐伯邦夫「実戦現代山スキー」東京新聞出版局昭 53. 今村源吉「歩くスキー」北海タイムズ社 p. 198. 昭 48「大学体育指導者研修会報告書」p. 95-103 その他に、スキーと自然との関係を考えて場合、回転のスキー辺倒の在り方や「ゲレンデスキー」というものに疑義があると、問題が提起されている。また「赤旗」もこの種の問題領域に積極的な関心を示し、同紙スポーツ欄『メドレー時評』1975. 2.5「スキーとスキー場」(登坂礼二), 1980. 1.10「スキーの原点とだご味」(長谷川 豊) その他で、スキー産業主導のスキーの在り方ではない、スキーの原点に帰ったスキーの楽しみ方が論じられている。
- 9) 「サンデー毎日」昭 54. 2. 18 日号のカメラレポート「'79 スキー点検」は、失われたモラルや業者・経営者の儲け優先主義の在り方に疑問を投げかけ、ゲレンデスキー花咲かりの今日のスキーブームに「モラルと楽しみのため」というテーマでアプローチしているように、今日では肥大化した「ゲレンデスキー」の問題点が、週刊誌の狙上にもものぼるほどになってきている。その他『みんなのスポーツ』1979. 12 吉沢文雄「スキーオリエンテーリングの開発とチャレンジ」, 石倉照男「楽しいスキー指導法」等参照。
- 10) たとえば、教員養成大学保健体育教育部会「保健体育科教育の研究」不昧堂, 昭 50, p. 197-221. 第 29 回日本体育学会報告資料「体育学研究の成果をふまえた体育指導者養成のあり方についての提言」, 横須賀 薫「教師養成教育の探求」評論社等。
- 11) 前出 7) 中森論文に詳しいが、森川貞夫「スポーツ社会学」青木書店 1980. 4. p. 102-105. 学校体育同志会機関誌「運動文化」1979. 8 等参照。  
「健康の論理」とは受動的なものではなく、人間らしい生活を営む権利を追求する思想であるが、もしそうした諸権利を享受する条件がなかったり、制限されていれば、それらを除去し、その条件を積極的に獲得する「行動の論理」でもある。1978. 2. 11 ユネスコ 第 20 回総会で採択された「international charter of physical education and sports」第一条には「体育・スポーツの実践は、すべての人にとって基本的権利である…」と明記されている。しかし、それは単にスポーツ欲求の個人的な解消に矮少化されるものではない。身体的現実が、社会経済的諸条件と身体文化の結節点として存在することが認識されれば、スポーツ欲求の社会的充足の意義が理解され、スポーツの生活化とは、スポーツの世界における真に徹底した民主主義の貫徹と同時に、政治、社会経済の民主的変革とも無関係でないことが認識される。即ち、体育・スポーツに於ける主体者形成とは、体育・スポーツの「技術的教養」と同時に、体育・スポーツに関する「社会科学、自然科学的教養」に裏打ちされた行動力のある権利主体を育成することにある。各々の教育階梯における体育科教育の方法論は別稿に譲るとして、スポーツのもつプレイエレメントを完全に追求するうえでも、スポーツを公的なものに対する一つのオブリゲーションととらえがちな日本のスポーツ心性を変革するうえでも、体育・スポーツにおける主体者形成という課題は重要である。

## 2. スキーの捉え方

前節でも若干触れたが、野外運動は、自然保護活動や環境教育と同じではない。それは今日、変質・破壊されつつある人間の身体<sup>1)</sup>、有機的自然<sup>2)</sup>の全面的発達、その一層の人間の発達に關与する他のスポーツ文化<sup>3)</sup>と同様に、身体形成という重要な機能を把持している。勿論、スポーツの有する健全な側面、肯定的な側面ばかりを強調しては、浅薄、一面的なスポーツ礼賛論になりかねないが<sup>4)</sup>、しかし今日のスポーツ文化論は、たとえば「アポロ的」とか「ディオニソス的」といった、スポーツのもつ「プレイエレメント」(fun element)の性格論<sup>5)</sup>の次元とは異なった論議が必要とされる。

自然は二重の意味で、人間にとって本質的な存在であるといわれるが、それは既に明らかのように、人間が「自己の身体に備った自然力(有機的自然)腕や脚、頭や手を動かす<sup>6)</sup>」ことによって、自分の外への自然(非有機的自然)に働きかけ、自然素材を自己自身の生活のために使用され得る形態で獲得する中で、「人間がそれで生きてゆく非有機的な自然の範囲」<sup>7)</sup>をますます普遍的なものにし、同時に「自分自身の自然(天性)を変化させる」<sup>8)</sup>中で、その人間的な身体的諸形質、諸機能を歴史的に獲得してきたという事実<sup>9)</sup>に立脚している。「人間はただ自然存在 *Natura Wesen* であるばかりでなく、(まさに)人間的な自然存在である<sup>10)</sup>」ところに、目的意識的な労働を本質的契機として生成、発展してきた類的存在<sup>11)</sup>としての人間をみることができる。

ところで今日重要なことは、こうした人間にとって本質的な存在である自然が、まさにその二重の意味に於て、変質・破壊されつつあるという現実である。スポーツ文化は、こうした現代の問題領域にどの様にかかわりあうことができるのであろうか。

スポーツ文化とは「君が食い、飲み、書物を買ひ、劇場や舞踏会や料理屋へ行き、考え、愛し、理論づけ、歌をうたい、絵を画き、詩を作り<sup>12)</sup>」等々の人間的要求と同様に、人類が歴史的に獲得・形成してきたものに他ならない<sup>13)</sup>。スポーツの母は労働であるというが<sup>14)</sup>、スポーツ文化の今日的性格は、猿が人間になるについて、かつての労働が果たした身体形成的、人格形成的機能に注目して論じられなければならない<sup>15)</sup>。スキーもそうして開かれたスポーツ空間の一つであるが(それは古代北欧や北アジアの狩猟や遊牧の民が、生活の手段として創出したものである—「スキー発達史」実業之日本社)今日のスキーの楽しみ方の多様性にも窺えるように、スポーツのもつプレイ・エレメントは一人歩きする。ところで体育科教育の現状は、スポーツ教材花咲かりであるが、しかし、このことはスポーツのもつ「楽しさ」を追求することが、この教科の第一級の目標であることを意味するものではない<sup>16)</sup>。「専門スキー実習」は、自然が二重の意味で破壊されつつある今日の時代の様相の中で、体育科教育として「スキー」という文化財をどの様に位置づけるかが、重要なのである。

今日のスキーの楽しみ方を批判的に素描すれば、それは所謂矮少化された「アルペン型スキー」への志向が主流を占めているといっても過言ではない。それは用具の問題も含めて毎年のスキー技術の技術的流行の消長にもみられるように、タイムを競う「競技スキ

ー」の世界に完全に従属している<sup>17)</sup>。

一般的に「スキー技術」にしても、「スキー指導技術」にしても、技術中心のスキーに関しては、多くの大学スキー指導者の力量は、「全日本スキー連盟 (SAJ) 公認指導員」や「日本スキー教師連盟 (SIA)」等の「スキーインストラクター」には遙かに及ばない。こうした状況の中で大学スキー実習の目的が、正しいスキー技術習得の位置づけを曖昧にしたまま、技術主義的に偏向すればする程、指導者も含めてその「技術的コンプレックス」は耐え難いものとなり、それが自然との出会いを稀薄なものにし、スキーをますます「人工的なコブの斜面 Piste」に封じ込め、みてくれのスキー技術の流行に拍車をかけるという悪循環を形成する。スキー技術の未熟な指導者ほど、彼自身の回転の出来、不出来に、そしてコブの Piste を征服したか否かに一喜一憂し、「自然」は彼、指導者の眼中にはない。指導法のバリエーション不足は、単にスピードを追求したり、コブのピステに学生を挑戦させるという、スキーの「プレイエレメント」に安易に逃避する指導放棄となって結果する。スキー技術の未熟さも含めて、こうした指導者としての専門的力量不足は、学生のスキー観や自然観を狭い偏頗な領域におしとどめてしまう危険性が大きいといえるだろう。梅田が「現在、スキーを中心とした大学の冬季の野外活動ではスキーの技術向上が主目的となり、雪山へのツアーや夜の雪の山に接することも体験することもなく終わってしまうことが多い<sup>18)</sup>」と論ずる時、大学のスキー指導者には、高度なスキー技術は勿論であるが、「スキーの捉え方」に、今日の *Zeit Geist* を鋭く読み込んで行く力量が必要であるといえる。

さて、近代スポーツの多くは、近代イギリス資本主義社会の生成発展の歴史との関連を無視しては考えられないが、それは中世封建農民のそれまでの身分制的な、賦役的、貢納的スポーツや貴族の特権的なルーラル・スポーツが、封建社会の解体過程の中で歴史の舞台からドロップアウトするのに代って、「自由」「平等」の旗印の下に自らのスポーツを創出した 19c イギリス新興ブルジョア階級のスポーツ精神を反映している。そのスポーツ観念はスポーツのルールに集中的に表現されるが、それは常に同一の公平な条件下でゲームが逐行されることを要求する<sup>19)</sup>。こうしたスポーツ精神は、イギリス資本主義社会の上昇に伴うその地理的普遍性の拡大と共に、文化としての普遍性 *universality* を獲得していくのであるが、このことはまた競技スポーツと野外運動との方向性を分ける分岐点にもなってくる。たとえば競技スキーや水泳競技の場合、アルペン競技では滑降バーンに塩をまき<sup>20)</sup>、水泳ではコンクリートの消波プールでその勝敗が争われるという様に、それは生きた流動的な自然環境をできるだけ人工的にコントロールして、公平、平等性を確保する方向で、そのルールは洗練されていく。たとえそれが大自然を舞台に展開されるスポーツではあっても、競技スポーツに於ては、自然は単なる背景に押しやられるということの意味する。野外運動は、こうした競技スポーツとは異って、タイムとか勝敗を争うものでなく、同じスキーや水泳にしても、それは生きた流動的な自然との *begegnung* そのものを大切にする思想と態度を尊守する。このことが、野外運動とその他のスポーツとを本質的に区別するメルクマールであり、今日の時代の様相の中で、競技スポーツには求め得ない、

自然と人間の関連にアプローチし得る野外運動の位置づけを規定する。野外運動としてのスキーは、競技スキーとは異質の方向性をもつものであることを、ここでは第一に理解する必要があるだろう。

ところで、野外活動は自然との触れあいを主として追求する思想と態度を尊重するというが、しかし今日のそれは、単に鑑賞の対象として自然を理解したり<sup>21)</sup>、消費の対象としてみる享樂的自然観や金儲けの対象とみる自然観から真に脱却し得ているだろうか。様々の生産労働を通して、自然の人間生活に於ける意味を直接体験できなくなってきた今日、われわれの自然認識は単なる旅行者としての一過性の一面的な享樂的自然観に陥り易くなってきたといえるだろう。

高い宿泊料金や高価なスキー用具に象徴される「ゲレンデスキー」は、リフトを頼って上から下へと滑降するだけのスキー技術の追求に終始しているが、そこではスキー場は、単にスキーさえ楽しめれば良いという認識のレベルにとどまってしまい、たとえばスキー場建設に伴う自然破壊等には目が届かず<sup>22)</sup>、その自然認識は、前述したように消費者としての一過性の一面的な享樂的自然観にながされ易い。「溪流を歩いて溪魚や昆虫の生活を知らず、森林を歩いて樹木や草花の生命を見ず、山野を跋歩して焚火や野宿を知らず、という、自然そのもののの中に身をおきながら実はその自然の本質に触れることの少ない態度は、自然を愛する、と口にしながら実は自然を破壊する加害者になっているという無残な結果を招くといっても過言ではないだろう<sup>23)</sup>」という。

大学スキーは自然を求めるために自然を破壊するという、背反する結果を招来しないスキーの在り方を追求しなければならない。「都会では今、自然の大切さがさかんに叫ばれている一方で、その都会人が設備のより整った宿を求め、スキー場もアルプスの中腹から頂上へと、赤く地肌をのぞかせた大スロープに集中し、シュプールをえがくことを望んでいる<sup>24)</sup>」一般的風潮の中で、筆者らは雪と対峙した生活を通してこそ、単に娯樂の対象としてしか自然を認識できない享樂的な自然観を脱却する道が与えられると考え、「専門スキー実習」とは別に、一般体育実技「野外運動コース」受講者を対象に「雪上キャンプ」の教育実践を続けている<sup>25)</sup>。確かにそれは、生活とはいえ、依然としてフィクショナルなものではあるが、雪と寒さと闘って、毎日の生活条件を確保する中では、その自然認識やスキーの伝え方には、自ら一定の角度のちがいが生れてくるのである<sup>26)</sup>。同居、同財、同爨といい、あるいはまた「zu einem scheffel, Rauch und Brot<sup>27)</sup>」といい、そうした言葉に象徴される生活共同体的な雪上キャンプには、スキーの後は室毎に分散して、つくられた食事をたべるだけの所謂通常のスキー実習とは異って、自然と人間のかかわりにおいても、一つの独特なアトモスフィアが流れるのである。勿論、こうした実践は、指導者、装備、場所の問題も含めて、どの大学でも実践できる問題ではない。しかし、「大学スキー実習」はこれまでの「ゲレンデスキー」の問題にみたように、「ジェットコースターがうなる遊園地や喧騒と雑踏の海水浴場のごとき<sup>28)</sup>」スキー場に「スキー」を閉じ込めず、「白銀に輝く壮麗な冬山の自然、清浄そのものの張りつめた大気、豊かな光と色の世界、厳しい寒気、息もつけぬ激しい風雪、静かな降雪、… それら自然の一大シンフォニー<sup>29)</sup>」に「ス

キー」を解放すべきである。勿論「雪のある野山を跋歩するに、スキー技術が無視することとはナンセンス<sup>80)</sup>」である。「あらゆる条件の中にも身を踊らせているだけの確実なスキー技術を習得<sup>81)</sup>」させることは、「専門スキー実習」のスキー技術習得の目標であるが、それはあくまでも自然との対話を求めるスキー観に支えられなければならない。

## 注

- 1) たとえば、正木健雄「子どもの体力」国民文庫、大月書店、1979.
- 2) K. マルクス、藤野 渉訳「経済学・哲学手稿」国民文庫、p. 104-105.
- 3) 長沼真沼「文化要求としてのスポーツ」『唯物論』1978. 5. No. 9 所収、p. 120-133.
- 4) 小関三平『現代人と「するスポーツ」』『Universitas 特集現代スポーツ批判』法政大学第3巻第1号、1974. p. 13-22.  
G. H. Sage「Sports and American Society」p. 397-427.  
J. A. ミッチェナー、宮川 毅訳「スポーツの危機」サイマル出版会、1978 等に良くも悪しくも、スポーツが人間の営みの一つであることが理解される。
- 5) 市村操一、佐伯聡夫、阿部一佳「スポーツにおけるアポロ性とディオニソス性」『新体育』Vol 49, No. 2, 1979, p. 32-43.
- 6) K. マルクス、全集刊行会訳『資本論』「第3編絶対的剰余価値の生産」大月書店版、1968, p. 234.
- 7) 前出 2).
- 8) 前出 6).
- 9) 渡辺 仁「ヒトはなぜ立ちあがったか I~III」『科学』Vol. 50, No. 1, No. 2, No. 3, 1980 が興味深い生態学的構造モデルを提示している。
- 10) 前出 2), p. 224-225.
- 11) 同上 p. 104.
- 12) 同上 p. 169.
- 13) たとえば中井正一『美学入門』(河出書房)は、水泳の技術について「ところが、この法則は自然の法則のように、宇宙の中にあった法則であろうか。これは人間と水との間に、人間の創りだした新たな法則ではない。人間がこの宇宙の中に、自然と適応しながら、自分で創造し、発見し、それを固め、そしてさらに発展させていく法則である。これを『技術』というのである」と論じているが、スポーツ文化は、人間が創出し、発展させてきた身体運動の形式にかかわる文化領域の一つである。
- 14) 山本正雄『スポーツの社会経済的基礎』道知書院「生産力の発達の結果、剰余生産物が生じ、一方にこれを占有する坐食階級と、他方に労働専門の階級とが社会の内部に分化し、死物化した生産技術は、いきおい労働遺物として前者の手にのこる。だから極く大まかに云えば、人類は最初の階級社会である古代奴隷制のもとで、最初のスポーツをもつことになる。蓋し、本来スポーツとは、非生産者と化した有閑階級の側で、かつての生産技術が非生産的技術に転生したものにはかならない」と論じている。
- 15) F. エンゲルス、伊藤嘉昭訳「猿が人間になるにあたっての労働の役割」青木書店。  
津久井佐喜男「労働過程と人格形成」『教育学論集』中央大学教育学研究室 No. 15, 1973. 3, p. 1-51 等参照されたし。  
渋谷寿夫「現代環境論の一考察」『科学と思想』新日本出版社 No. 30. 1978. 10「生産過程から(狭義の)人間労働の排除がすすんでいる現在、スポーツはいっそう目的意識的に、合理的におこなわなければならない。…これからの環境問題にはスポーツ空間が大きくとりあげられなければならないであろう」(p. 32) という指摘は、生態学者の問題提起として貴重である。前出 3) の長沼論文も、この種の角度からの哲学者のスポーツへの関心を示すものとして興味深い。
- 16) プレイ論が一つの流行となっている。学校体育へのその援用は、スポーツの「楽しさ」論で終

- 始している。それは体育科教育を「education through physical activities」と考える体育の教科観と表裏の関係にあり、いずれも体育科教育固有の性格を曖昧なものにしている。佐伯聡夫「『楽しい体育』論の根拠と内容」『学校体育』1960. 6, p. 64-68.
- 17) G. A. BROTEN. et al「Skiin'g is Creditable」『JOHPER』11-12, 1970, p. 31. 競技スキーにおける優勝国のスキーマソッドが、基礎スキー界の技術的動向を支配する。特に日本の基礎スキー界の外国への技術的追随は際立っており、1959 年以来、1963, 1965, 1969, 1971, 1973 と全日本スキー連盟 (SAJ) の「スキー教程」はめまぐるしく改訂され、1980 年には更に新教程が発表されるという。
  - 18) 梅田利兵衛「雪上野外活動」『昭和 48 年大学体育指導者研修会報告書』p. 108.
  - 19) 中村敏雄「近代スポーツの論理」『現代スポーツ論序説』大修館所収, 1977, p. 67-164.
  - 20) 滑降バーンに塩をまいて固くすることにより、コースの荒れを防止するのであるが、そのコースの植生は塩分による地力の衰えから、決定的なダメージを受ける。東京オリンピック冬季大会の恵庭岳スキーコース開発に対する自然保護団体の反対にも見られたように、時としてスポーツは自然破壊の急先鋒にもなる一前出注 1-3)
  - 21) 吉良竜夫「自然保護の思想」人文書院, p. 167.  
西口親雄「森林と人間」三友社, p. 241. 特に観光開発という名の自然破壊を看過すべきではない (信大教養部「続自然保護を考える」共立出版)。
  - 22) 「冬季体育施設」第一法規 p. 25.
  - 23) 芹沢一洋「自然とつきあう 50 章」森林書房 p.24.
  - 24) 同上 p. 110 より転引用, 横沢 洵「山と博物館」1976. 12.
  - 25) 佐野 裕「大学スキー実習の在り方を求めて——一般体育実技「野外運動コース」における位置づけ」『野外運動研究』第 3 巻, 第 1 号, 昭 54. 野外運動研究会発行, p. 23-32.
  - 26) 同上, p. 30-31 で触れているので参照されたい。
  - 27) 清水盛光「家族」岩波全書 p. 2-17.
  - 28) 「スキーアルピニズム宣言」『スキーアルピニズム』No. 3. 1976. 1.
  - 29) 同上.
  - 30) 前出 23). p. 111.
  - 31) 同上.

### 3. 組織・運営、プログラム

体育科専門スキー実習の目的や内容に関して、その生成の契機や歴史的変遷をたどることとは興味のあるテーマであるが、ここでは筆者らの担当した過去四年間について報告する。本学のスキー実習は、5 泊 6 日、0.5 単位である<sup>1)</sup>。

#### 1) 時期・日程

日本のスキー人口は 1,000 万人ともいわれる。12 月下旬～1 月上旬、スキー場は「休日の遊園地のように混雑する。そこで、この時期及び祝祭日の重なる連休等を避け、雪山が静寂をとりもどし、雪のコンディションも良好な 1 月中旬、ここ数年間は 1 月 20 日前後の月曜日から土曜日に実施している。

#### 2) 場所

1976 年まで長野県菅平スキー場を使用していた。初級者から中・上級者まで多様なコースが設けられており、ツァーコースも根子岳を中心に多彩であるが、積雪量が不安定のため、1977 年より山形県蔵王スキー場に変更。蔵王は 1979 年には第 11 回世界スキー指導者会議 Interski が開催されるなど、日本有数のスキー場であり、歴史も古く、特に「ドッコ沼」「ユートピア」辺の自然景観は、指導の取扱い方によっては、学生の「自然観」や

表 1 指導者の年次推移

年 次	専任教官	非常勤講師	学生数
1976	5名	2	45
1977	5	1	44
1978	6	0	43
1979	4	0	44

「スキー観」に他のスキー場では味えないある種の「フクラミ」をもたらすのに効果がある。

### 3) スタッフ

指導組織図は省略する。技術指導は専任教官と、1977年までは非常勤講師として依頼した SAJ

公認指導員有資格者である他大学教官とで担当していたが、教育学部の劣悪な予算規模の中で、スキー関連予算は年々縮小され、それが指導者数の減少となり、1979年は専任教官4名（一名は医務担当）で実施。専任教官のスキー技術程度は、SAJ バッジテスト一級以上3名、他は二級以下である。（表1）

SAJ バッジテスト一級とは、技術的には基礎スキー領域に於て最上級の技術水準とされるものであり、更に指導者として要求される技術水準を示すものとしては公認指導員制度がある。勿論、大学スキー指導者の専門的力量の一つであるそのスキー技術水準をはかる唯一のメルクマールが、SAJ のスキーインストラクターライセンスなどでないことは当然のことである。しかし、指導者としての人間的資質や指導力、スキーに関する科学的なものの見方や考え方問題は別にして、体育科専門スキー実習の指導者のスキー技術水準としては、SAJ 一級程度の技術水準が最低限要求されるといえるだろう。スキー技術観はスキー観を反映するものである。従って人工的なコブの Piste でその技術水準を検定する SAJ 一級とは、一つの規準にすぎないのであり、ここでの要旨は、最低限その程度のスキー操作能力・技術が必要であろうという意味である。本学専任スタッフの技術的水準はその意味で満足すべきものであり、人工的な Piste だけでは測れない奥行きのあるスキー技術を保有している。

### 4) プログラム

「79年のスキーシーズンは、志賀高原の“ディスコ乱闘事件”で明けた。深夜ホテルの一角に設けられたディスコティックで酒を飲み、踊り狂ってエキサイトし、若者同志が掴みあいのケンカをした。傷害事件を引き起したのが正月の2日と7日・・・」（「サンデー毎日」1979. 2. 18号）

専門スキー実習は、こうした風俗化したスキーの在り方に批判的な立場を堅持して、スキーの原点に帰ったスキーを追求する観点から、そのプログラムは構想されている。それは5本の柱によって構成される。

- ①スキー観について（「自然と人間」「蔵王の自然」等）
- ②スキーに関する科学（「スキーの運動生理」「回転のメカニクス」「スキーの歴史」等）
- ③スキー指導（「技術指導の系統性」「スキーヤーの心理」「安全管理」等）
- ④スキー技術の実践的理解（「スキー実技」「自然との対話を求めるスキーの楽しみ」）
- ⑤教官と学生、学生相互の人間的交流（アフタースキーの在り方など）

表 2 プログラムの一例 (1979 年度「専門スキー実習テキスト」より)

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
7:30 朝食	宿舎到着				8:30 ツアー 上野中央公園 ↓ ツアースタッフ 合流 沼澤 パランゲ ダイス 坂 山 樹 水 トピア ユート 横倉 3:00 宿舎		
9:00 午前の活動 11:00	休息		基礎練習	基礎および応用練習		基礎および応用練習	テスト
12:00 昼食	開講式						閉講式
休憩	スキースタッフ ミーティング						
2:00 午後の活動 4:30	別テスト 基礎練習		基礎および応用練習 スキーハイキング	ゲレンデめぐり		グループ別 自由練習	
6:00 夕食							
7:00 夕方の活動 9:00	報告と討論 「スキー用具について」 「スキーの安全管理」	報告と討論 「スキーはなぜ滑るのか」 「スキーの回転メカニクス」 映画 「全日本スキー教程」	報告と討論 「蔵王の自然」 「技術指導の系統性」	報告と討論 「自然と人間」 「スキーの歴史」		「雪上ゲーム」 ***** パーティー	
10:30 消灯							

事前指導 (5 回 = 5 時間)

表 3 実 技 カ リ キ ュ ラ ム (1979 年度)

	第 一 日		二 日		三 日		四 日		五 日		六 日	
	午	後	午	後	午	後	午	後	午	後	午	後
初 心 者 ・ 初 級 者 班	*着脱 *転倒・起立法 *方向変換 *歩行 *登下降 *滑走(ブライト)		°ブルークフアー °ブルーク斜滑降 °斜滑降谷開き停止 °ブルークボーゲン	°ブルークボーゲンによる制限滑降とスイング °ブルークボーゲンによる制限滑降とスイング	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ
中 級 者 ・ 上 級 者 班	*転倒・起立法 *方向変換 (キックタ ーン) *歩行 *推進滑走 *スケーターフィング °ブルークフアーレン °ブルークボーゲン		°斜滑降山まわり °横すべり °谷開きタートル °ブルークタートル	°谷開きタートル °谷開きタートル °谷開きタートル °谷開きタートル	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ	°ブルークタートル °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ °ブルークギラ

\*: 基本技術 °: バリエーション技術

### 5) 技術の到達目標

初心者・初級者班：雪山の深雪にも通用する実戦的な制動系技術を獲得すると同時に、基礎的なパラレルターン（開脚）を習得する。

中級・上級者班：雪山の深雪にも通用する実戦的なジャンプターン、ピボットターン<sup>2)</sup>、ステップターン等の発展技術を習得する。

次にスキー技術「実技カリキュラム」を例示する。（表 3-p. 160）

#### 注

- 1) 野外運動関連科目として「スキー」（0.5 単位）「スケート」（0.5 単位）「キャンプ」（0.5 単位）がある。履習方法は「スキーおよびスケート」「スキーおよびキャンプ」（各 1 単位）という組み合わせになっている。（1980 年度現在）
- 2) SAJ「日本スキー教程」の発展技術「ジャンプターン」「ステップターン」「ピボットターン」の一つである。ピボットとは、回転の軸を自由に変えて行う運動をいい、角付けと脚部のねじれによって蓄えられた反発力を、脚部の運動によって解放し、スキーを滑らせながら角付けを切り換えるものであり、スキーの性能と身体へのねじれもどしの運動をターンの原動力に使った技術である。（かつての「曲進系」技術との異同は議論のあるところであるが、ここでは省略する）

## 4. 実践上の諸問題<sup>1)</sup>

例年、実習参加学生には、「専門スキー実習に参加して」というテーマで「実習の在り方」を批判的に検討する課題を課し、そこでの評価、意見を実習に反映させる形で積み重ねてきたが、1979年度には、参加の動機、スキー技術水準、用具、宿舍、経費、技術指導等について、より具体的な資料を得たので報告する。調査項目は以下の如くである。

### 体育科選択専門実技スキー実習アンケート I

性別 男・女 生年月日 生（ ）才

1. スキー経験の有無。（有・無）
2. 経験（有）は次の項目に答えて下さい。
  - 2-1 経験年数（シーズン）
  - 2-2 1 シーズン何日位滑りますか。（約 日）
  - 2-3 それはどのようなスキー行でしたか。
    - イ) 学校（小・中・高）のスキー行事
    - ロ) 学校以外の団体（例. 旅行社など）のスキー行事
    - ハ) 友人とのスキー行
    - ニ) 一人
    - ホ) その他
3. 体育科に入学して良かったと思いますか。
  - イ) 良かった
  - エ) 悪かった
  - ハ) わからない
4. スキー実習に参加する主な目的について自由にのべて下さい。

## 体育専門実技「スキー実習に参加して」アンケート II

性別 男・女 氏名 生年月日 昭和 年 月 日 年令 才

	5	4	3	2	1
1. スキー実習に参加して有意義であったと思いますか。					
2. スキー技術指導について満足しましたか。					
3. スキー技術は向上したと思いますか。					
4. スキーをコントロールできるようになりましたか。					
5. 友人関係は深まりましたか。					
6. 寒さについて自信ができましたか。					
7. 自然について親しみが増しましたか。					
8. 教官との親しみが増しましたか。					
9. 健康状態はどうでしたか。					
10. 生活態度は良かったと思いますか。					
11. スキーは楽しかったと思いますか。					
12. 今後スキー指導をする場合の自信ができましたか。					
13. 体育科を専攻して良かったと思いますか。					
14. スキーを好きになりましたか。					
15. 経費は高いと思いますか。					
16. 実習期間は適当と思いましたか。					
17. アフタースキーは楽しかったと思いますか。					
18. スケジュール (実習プロ) は適当だと思いますか。					
19. ツアーには満足しましたか。					
20. オリエンテーションは充分であったと思いますか。					
21. 事前学習は充分であったと思いますか。					
22. スキー場には満足しましたか。					
23. ミーティングの内容や形式には満足しましたか。					
24. 往復のバスには満足しましたか。					
25. 実習中、自由な雰囲気を感じましたか。					
26. 班の指導について批判的に述べて下さい。					
27. 実習前に何日ぐらいスキーを滑ってきましたか。今シーズン (約 日位)					
28. 今回の実習でかかった費用はどのくらいですか。(実習費, 用具代金も含めて)					

5 4 3 2 1  
 非常 良 普 あ 良 悪  
 常か 良 通 ま く っ っ  
 に っ た 通 り な っ た  
 っ た た 通 っ た

## 1) 結果の画像分析

①自然との対話を求めるスキーの在り方を追求してきたのであるが、設問 II-7 にみる如く約 80% の学生が肯定的な評価をしている。「美しいだけが自然ではない。きびしいのも自然。…一番つらかったのは、やはりツアーだ。吹雪の中、顔の寒さを防ぐマフラー等は吐く息で凍ってしまった。手足も冷たくなって 貴重な体験をした」(戸祭章子, 昭和 54 年度入学) など、自然のもつ多様な顔を体験したが、しかし同時に設問 II-19, ツアーについてみる様に、約 60% の学生が消極的な評価をしている。気象条件が悪かったとはいえ、現在のツアーコースは、ゲレンデめぐりの域を一步もはず、自然とのダイナミックな出会いに欠ける点は否めない。確かに、スケールの大きな蔵王スキー場の自然景観は、学生を満足させるものであったが、それはファッションナブルなみでくれのスキー技術には

ない、スキーの原点に帰ったダイナミックなスキーを体験するという点では、未だ不十分であったといえるだろう。勿論、「山を切り開いてつくられた自然……リフトがいくつもかかり、雪上車がゲレンデを踏み固め、そしておまけにスピーカーからは、バックグランドミュージックが流れるスキー場で、われわれはスキーをするのである。われわれは恐ろしいことにその不自然さに何の疑問も感じない。そればかりか、こうでなくてはスキーではないといった感じをもつようになってしまっている。もしも、このスキー実習に参加せずにあの夜の研究発表やあの吹雪の中のツアーといったものを体験する機会がなかったら、私のスキーに対する考え方は、まさに不自然なものになっていたことだろう」(片倉元次昭、54年入学)という様に、筆者らの期待する成果も少しずつ前進している。②スキーに関する科学的な知識についてはどうか。勿論、学生の主観的印象・評価からいえば「グループ別の研究発表会も忘れられない思い出の一つである。時々、眠たい時もあったが、スキーの構造、スキーの回転メカニクス、自然と人間……等、これからも多いに役立つだろう」(矢島正樹)「各グループが事前に調べあげたことについて、全員でディスカッションを行なう。これが大学のスキーの実習の真の姿だと思いました。各質問に対して、いっしょうけんめい考える発表グループの姿や、なにやら不気味な教官達の姿が実に印象的……」(松田裕)という様に、運営に関しては肯定的な評価が多いのであるが、③今後のスキー指導という点では、設問 II-12, 「3」 97.7%, 「2」 29.5% と、学生の専門的力量を高める上で、学生自身その不十分さを認識している。これは④のスキー技術の向上(設問 II-2)とも関連するが、技術水準は確かに実習に参加することによって向上するが、その技術レベルは、指導者としての水準には至らないものである。今後は「水泳」の単位認定基準同様、「スキー」も「専門教育」としての必要な知識・技術のミニマムを明確にし、カリキュラムを検討する必要があるだろう。それらに関連した反省点の一つとして、従来、技術指導の実際に於て、技術の系統性や指導法のバリエーション等を明示して、本質的な核となる技術と補助的な技術との区別と関連を指摘する指導が弱かったといえるだろう。あるいはそれはまた、学生個々人のスキー技術上達に関する諸問題を、同時に一般的な問題としても捉えなおし、その解決法を全体の中で明らかにしていくという教授・学習過程の組織化を、意識的に創りあげる姿勢に弱く、従って学生の意識も、自己の技術への個人的な対応に終始し、それを指導法という観点から把握するという視点が弱くなり、「専門教育」という点で、その技術指導の取扱い方は一面的であったと反省されるのである。⑤教官、学生相互の交流は、積極的、肯定的評価が多いとはいえ、レクリエーションミーティングのもち方に工夫の余地があるという批判的評価も多く、今後の課題といえよう。しかし、このスキー実習を通して、「体育科の連帯」が生れ、「ドッコ沼」で心をつつにして歌ったことが忘れられない思い出(田中義樹、宮川ゆかり他)という様に、体育科一年を対象とした専門教育に於ける「スキー実習」の意義は大きいといえる。

## 2) 班別指導について

従来、班別については経験日数や技術検定、自己申告など、種々の方法がとられてきた。特に初心者の班別については、伊藤らの報告<sup>2)</sup>があるが、武蔵中・高、茨城大学一般教育

等（未発表）の経験則を参考に、全ての技術レベルに妥当する方法を模索した。一般に実技検定による方法は、講習はじめのため「事故」の問題や、特に多人数の場合、受験者の順番待ちの時間的ロス、加えて初心者のグルーピングには使えないということもあり、班別する上で信頼性が高く、安全で簡便な方法が望まれていた。昭和 51, 52 年度は自己申告によるグループを、更にシュテムターン、パラレルターン等の実技検定を課して上・中級班を編成し、初級班プルークボーゲン、初心者という班別方法であった。

〔昭和 53 年度テスト〕

班別テスト 1. エイトフィギュアテスト—3 m の旗間を 20 秒間に∞の字にまわる回数

班別テスト 2. 距離 20 m, 斜度 12 度の斜面を下から出発した往復タイム

技術検定テスト 3. 平均斜度 13.3 度, 最大斜度 19 度, 全長 80 m, 旗門 15 の片流れ斜面で制限滑降（旗門セット図省略）

〔昭和 54 年度テスト〕

班別テスト 1. エイトフィギュアテスト—前年度と異なり、3 m 旗門を 8 の字に 4 回まわる所要時間

技術検定テスト 2. 53 年度と同様の条件で実施

各テストの測定結果は以下のとおりである。測定値のうち、時間（秒）による値は、逆

表 4 スキー経験の有無 (N=42)

スキー経験・有	%	無	%
♂ * * * * *	40	* * * * *	60
♀ * * * * *	50	* * * * *	50
計 18人	42.8	24人	57.2

表 5 経験年数と一シーズン中の平均滑走日数 (N=18 ♂=\* ♀=○)

経験年数	滑 走 日 数						
	3日	4日	5日	7日	20日	不明	計
1 シーズン	** ○○	○*	○*				44.4%
2 シーズン	*	* ○			○*		27.7%
3 シーズン			*				
5 シーズン					*		
6 シーズン			*				
10 シーズン	*						
12 シーズン			*				

数変換値を用いて処理した。こうしたほうが、実際の（心理学的）意味が強くなると考えられる。

①昭和53年度時間制限法によるエイトフィギュアテストの結果は、表 9, 図 3 に示すとおりである。実習が進むにつれて学習効果がみられる。技術検定テスト結果との相関は、実習期間中を通じて高く ( $r=0.742\sim0.800$ ) (図 3), 学習の進捗の予測や班別の資料として、高い価値を見い出せる。

②昭和54年度課題達成法による結果は、表 10, 図 4 に示すとおりである。実習が進むにつれて得点は上昇している。技術検定テストとの相関は中程度であり ( $r=0.406\sim0.548$ , 表 11), 学習の進捗の予測や班別の資料としては、

中程度の価値をもっていると思われる。しかし、時間制限法と課題達成法との方法的優劣の厳密な検討は他日に期したい。

③また昭和53年度に行った往復登下降の結果は、表9、図5に示すとおりである。技術検定テストとの相関は高く ( $r=0.788$ , 表11), 学習進度の予測や班別の資料として高い価値が見い出せる。

④スキー歴(経験日数)の結果は、表6・9に示すとおりである。技術検定テスト結果との相関は低く ( $r=0.204$ ), また2班の  $SD=22.00$  にみる様に同一班内での経験日数の差も大きく、学習の進度の予測や班別の資料としての価値は高くないと思われる。即ち、班別の手がかりとなる資料は、従来経験的(あるいは便宜的)に用いられてきた、スキー歴をはじめとして、数々のものが考えられるが、本調査の結果からは、時間制限法による「エイトフィギュアテスト」ならびに「往復登下降テスト」が望ましいものと考えられる。この両テストの測定結果は、技術検定の制限滑降テスト結果と高い相関を示し、これらから技術検定テスト結果への回帰直線を最小自乗法で求めると、図6、図7のとおりになった。

表6 スキー行の種類(複数回答)

種 類		$n$	$\delta$ %	$n$	$\eta$ %	計 %
(イ) 学 校	小 学 校	*	4.8			3.6
	中 学 校	**	9.5	** 28.6		14.2
	高 校	****	19.0	** 28.6		21.4
	不 明	*	4.8			3.6
(ロ) 団 体		*	4.8			3.6
(ハ) 友 人		*****	33.3			(25.0)
(ニ) 一 人		*	4.8			3.6
不 明				*	14.3	3.6
(ホ) その他	家 族	***	14.2	*	14.3	14.2
	体育授業	*	4.8			3.6
	近所の人			*	14.3	3.6

表7 スキー実習に参加する目的の類型

主たる参加の 目的	初 心 者		初 級 者		中・上 級 者	
	$\delta$ N=18	$\eta$ N=6	$\delta$ N=7	$\eta$ N=5	$\delta$ N=5	$\eta$ N=1
スキーに関する 技術的、知的向上	***** ***** ***** *****	*****	***** *	*****	*****	
楽しさ志向			*			
人間関係	*****		*	*	***	
自然との対話		*	*	*		*
体力向上	—	—	—	—	—	—
単位のため	—	—	—	—	—	—
その他、不答		*				

表 8 スキー実習に関する学生の評価一覧 (アンケートⅡ)

項目		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
評価														
5	n	21	12	8	1	12	5	8	2	10	2	20	0	21
	%	47.7	27.3	18.7	2.2	27.3	11.4	18.7	4.5	22.7	4.5	45.5	0	47.7
4	n	23	21	22	18	18	19	21	28	17	12	23	10	14
	%	52.3	47.7	50.0	40.9	40.9	43.2	47.7	63.6	38.6	27.3	52.3	22.7	31.8
3	n	0	8	10	22	13	17	11	13	9	14	1	21	9
	%	0	18.7	22.7	50.0	29.5	38.6	25.0	29.5	20.5	31.8	2.2	47.7	20.5
2	n	0	3	4	3	1	3	4	1	7	14	0	13	0
	%	0	6.8	9.1	6.8	2.2	6.8	9.1	2.2	15.9	31.8	0	29.5	0
1	n	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0
	%									2.2	4.5			

項目		14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
評価													
5	n	26	4	0	4	6	2	4	3	27	7	1	2
	%	59.1	9.1	0	9.1	13.6	4.5	9.1	6.8	61.4	15.9	2.2	4.5
4	n	15	6	0	13	18	15	23	16	14	29	14	20
	%	34.1	13.6	0	29.5	40.9	34.1	52.3	36.4	31.8	66.0	31.8	45.5
3	n	3	21	34	16	15	11	14	11	1	7	15	13
	%	6.8	49.7	77.3	36.4	34.1	25.0	31.8	25.0	2.2	15.9	34.1	29.5
2	n	0	12	10	11	5	14	3	14	2	1	10	9
	%	0	27.3	22.7	25	11.4	31.8	6.8	31.8	4.5	2.2	22.7	20.5
1	n	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	4	0
	%		2.2				4.5					9.1	

しかし、技術的な問題を考えると「往復登下降テスト」は、初心者の班別テスト法としては、疑問の余地があり、その適否は今後の検討に待ちたい。

### 3) 班別実滑走時間 (昭和 54 年度) について

2 時間 30 分の講習時間の中で、実際に滑っている時間はどの程度であろうか。上級班は平均 10 分 56 秒 ± 4 分 53 秒, 中級班は 8 分 52 秒 ± 59 秒 82, 初級・初心者は 7 分 54 秒 ± 3 分 46 秒であった。新潟大学高田分校体育専門スキー実習の測定資料では 4 分~12 分という同様の傾向を示している。(未発表資料, 土方幹男助教授提供)<sup>9)</sup>速度を求めて実滑走距離の推定を班別に実施できれば, 講習の指導内容の取扱い方について好しい変革が期待できようが, さしあたってここでは, 班別実滑走時間の経日変化について報告することにとどめたい。(表 12)

表 9 53 年度 測定 結果

種目 班	スキー歴 (日)	8 の 字 滑 走						往復登降		技術検定 テスト	
		1 日目	2 日目	3 日目	4 日目	5 日目	6 日目	秒	逆数値	秒	逆数値
1 M (n=7) S D	18 9.23	4.07	3.96	4.04	4.61	4.64	4.61	30.71 (3.29)		12.46 (8.11)	
		0.64	0.71	0.37	0.32	0.32	0.52	3.15 (0.32)		1.50 (1.01)	
2 M (n=8) S D	16.25 22.00	3.30	3.56	3.56	3.73	3.97	3.91	43.38 (2.35)		14.38 (7.08)	
		0.23	0.29	0.32	3.35	0.36	0.44	6.28 (0.32)		2.19 (0.98)	
3 M (n=10) S D	5.50 2.32	2.85	3.08	3.25	3.68	3.73	3.50	55.10 (1.84)		16.27 (6.25)	
		0.36	0.61	0.46	0.47	0.42	2.89	6.95 (0.26)		2.22 (0.85)	
4 M (n=8) S D	7.13 5.60	2.38	2.81	2.94	3.00	3.25	3.41	64.25 (1.58)		18.38 (5.51)	
		0.19	0.42	0.32	0.38	0.33	0.30	9.92 (0.28)		2.25 (0.66)	
5 M (n=7) S D	2.75 2.37	2.50	2.54	3.00	3.39	3.36	3.43	77.71 (1.47)		19.41 (5.27)	
		0.38	0.39	0.63	0.72	0.75	0.54	37.03 (0.53)		2.92 (0.75)	

表 10 54 年度 測定 結果

種目 班		8 の 字 滑 走						技術検定 テスト	
		1 日目		3 日目		5 日目			
		秒	逆数値	秒	逆数値	秒	逆数値	秒	逆数値
1 M (n=16) S D		30.83	3.41	26.94	3.83	27.67	3.78	25.99	3.94
		7.44	0.79	4.75	0.68	5.91	0.84	4.37	0.58
2 M (n=14) S D		56.38	1.93	36.50	2.78	29.02	3.54	26.97	3.77
		18.50	0.51	5.24	0.39	5.14	0.61	3.62	0.48
3 M (n=13) S D		61.54	1.86	40.73	2.50	33.88	3.10	27.85	3.64
		25.30	0.64	10.15	0.59	8.73	0.62	3.33	0.40

表 11

	53 年度テストー測定種目の相関							54 年 度		
	8 の 字 滑 走						往復 登降	スキー 歴	8 の 字 滑 走	
	1 日目	2 日目	3 日目	4 日目	5 日目	6 日目			1 日目	3 日目 5 日目
テスト結果	0.742	0.800	0.781	0.782	0.791	0.825	0.788	0.204	0.406	0.548 0.460

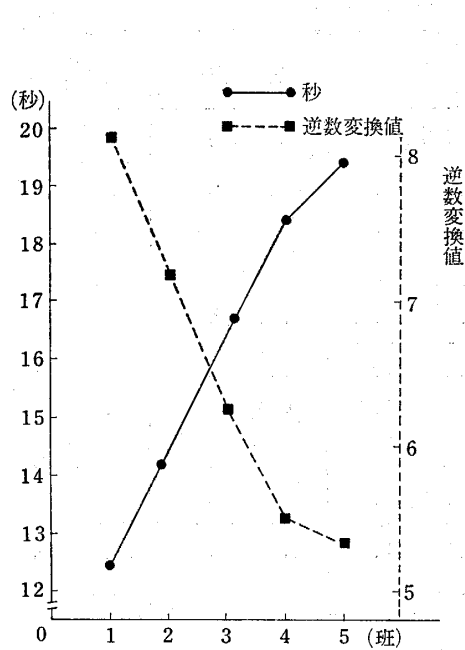


図 1 53 年度技術検定テスト

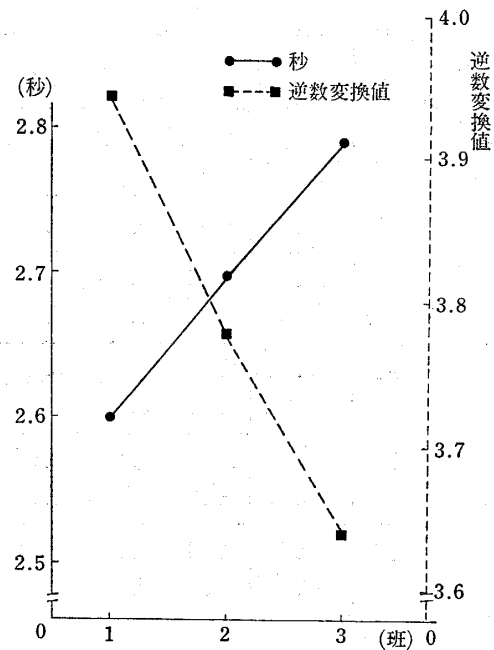


図 2 54 年度技術検定テスト

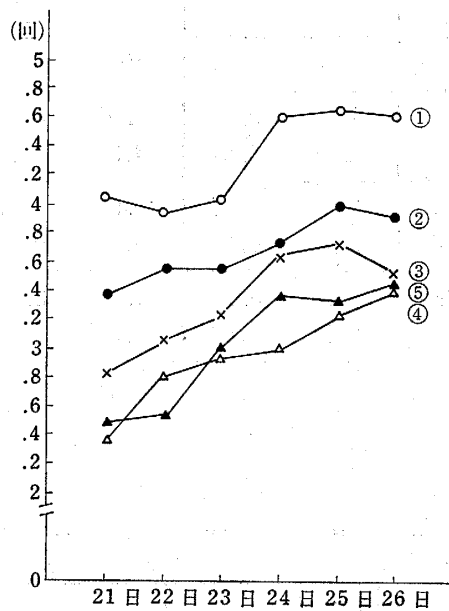


図 3 53 年度の8字滑走回数

○: 1班, ●: 2班, ×: 3班  
△: 4班, ▲: 5班

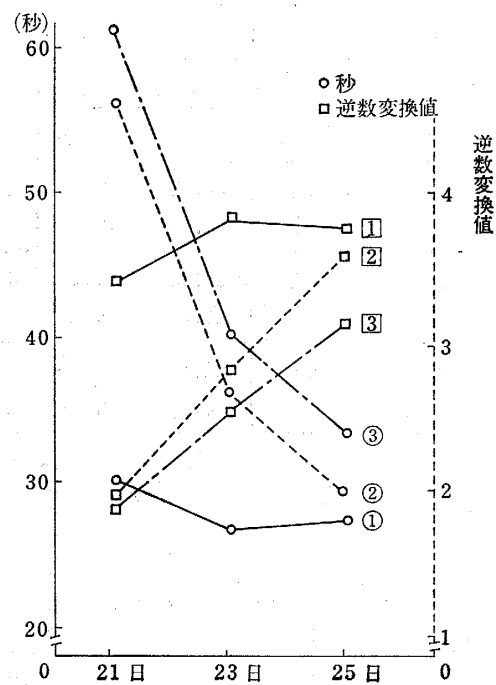


図 4 54 年度の8字滑走時間

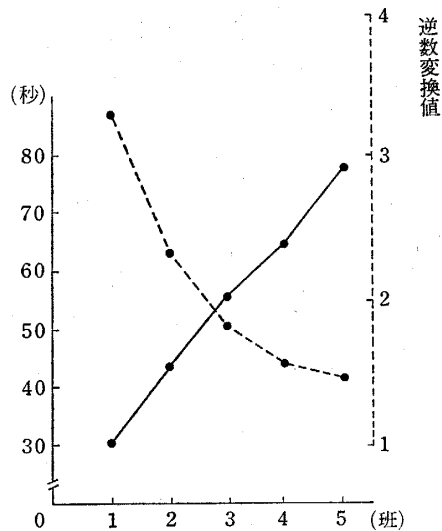


図 5 53 年度往復登降テスト

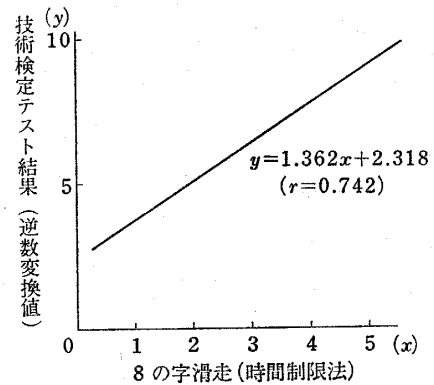


図 6 8 の字滑走 (時間制限法) と技術検定テスト (回帰直線)

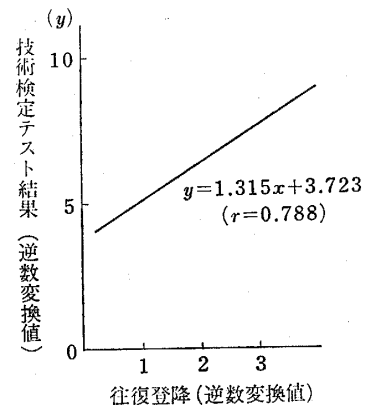


図 7 往復登降と技術検定テスト (回帰直線)

表 12 実滑走時間の経日的変化 (1979 年度)

(単位: 分. 秒)

班 別	1/21	1/22		1/23		1/24		1/25		1/26	$\bar{x}$	S D
	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前		
上 級 班	9.14	8.02	10.58	5.41	21.11	ツ		10.28	自由練習	テ	10.56	4.53
中 級 班	8.45	8.44	10.50	9.06	7.43	ア		8.13		ス	8.52	0.59
初 級 班	3.57	13.45	8.00	9.48	3.45	イ		7.45		ト	7.54	3.46

#### 4) スキー実習における外傷について

この事項については昭和48年から報告する。この間における外傷患者数は40名であって、性別の内訳は女子学生 24 名 (60%)、男子学生 16 名 (40%) である。外傷の種類は、表13に示すとおりであるが、捻挫が最も多く 20 例 (50%)、次いで打撲傷が 11 例 (27.5%)、切挫創 7 例 (17.5%) で、骨折は 1 例、その他として靴傷 (靴づれ) が 1 例であった。(一般体育のスキー実習では靴づれが非常に多い) 外傷の部位としては、下肢が最も多く 25 例 (62.5%) で、頭部顔面、頸部が 7 例 (17.5%)、上肢は 6 例 (15%)、軀幹部は 2 例

表 13 スキー実習における外傷 (1973-1980)

外傷のタイプ	頭・顔面・頸部	腕・手 部	軀 幹 部	腿・脚・足部	外傷患者数
捻 座		4	2	16	20
打 撲 傷	3	2		4	11
切 挫 創	4			3	7
骨 折				1	1
そ の 他				1	1
計	7	6	2	25	40

であった。外傷の種類と部位との関係を見ると、捻挫は足関節が8例、膝関節7例、手関節2例、肘関節2例、股関節1例であるが、足関節、膝関節が多く、さらに足関節、捻挫はその大部分は昭和40年代であり、これに対して膝関節捻挫は昭和50年代に多くなっているが、これはスキー靴の改良による一般的な傾向のようである<sup>4)</sup>。またこれを性別にみると、足関節の捻挫は女子学生に多く、膝関節捻挫は男子学生に目立った。打撲傷は上半身に比較的多く、頸部挫傷（むちうち損傷）も2例みられた。尚、軀幹部の損傷は肩および腰部の打撲傷各1例であった。切挫傷はスキーエッジによる頭部・顔面の切創が、最近増加しているようであるが<sup>5)</sup>、本実習に於ても同様の傾向がみられた。尚、他人のストックによる刺創が1例あった。骨折患者は脛骨骨折が1例あるのみで、本実習においては骨折の例は少なく、脱臼もみられなかった。外傷の発生転機は、転倒が最も多く、次いで他人との衝突である。

## 注

- 1) 宮畑虎彦他「本学におけるスキー参加者の実態調査」『東京学芸大学研究報告』第17集第6分冊。昭40. p. 25-37 には一般スキーに関する報告がある。その他池田八郎他『スキーに関する調査研究』『防大紀要』第25号。昭47. 9. p. 355-378。また「スキー実習」『日本体育大学研究所所報』第1号。昭48. 12. p. 97-134 には実習の目標を①技術の向上②指導法を学び、体育指導者としての素養を高める③野外運動の教育的意義の発見およびその理解を挙げ、実習について、事故発生の条件を探るという点から、疲労、積雪量、事故症例等について調査報告している。その継続調査研究としては、伊藤 孝他「同所報」第2号昭49. 12. p. 73-96。「第3号」昭51. 12. p. 51-67 がある。しかし、いずれも「スキー実習」の位置づけについての問題意識が不鮮明に見受けられる。
- 2) 伊藤 宏他「スキー講習における初心者の班別について」『静岡大教育学部研究報告・教科教育篇』No. 7. 1975. p. 81-89.
- 3) 前出1)「日体大研究所報」第2号、第3号に滑走時間のタイムスタディが報告されているが、それは6分～26分15秒というものである。
- 4) 上村正吉「最近のスキー事故の特徴と対策」『からだの科学』No. 89. 1979. p. 108-113. 黒木良克他「最近のスキー外傷」『整形外科』30 (6), 1979. p. 699-702.
- 5) 同上、黒木良克他

## 5. まとめにかえて

この「スキー実習」に関する報告は、学生とともに懸命にとりくんだ記録である。一つ

の区切りの時を迎え、たとえいかなる結果がでようとも悔いは残らないとさえ思っていた。幸にしていくつかの確かな成果もみられたのであるが、稿を終えるに当り、思いつつも果せなかったいくつかの問題がやはり去来する。次の発展への礎石となれどと願って書き添え反省とする。

近代体育にとってスキーの発現の意義は大きい。雪や雪国の生活にふれた書として鈴木牧之の「北越雪譜」や一茶の「雪とけて……」の句は、スキー発現以前の代表的感懐としてとらえてみる必要がある。雪は讃えられるものではなく、耐えるもの、差別されるものであり、活動性・創造性豊かな子供にとってさえ絶望の世界であったことが窺える。この世界を一転歓喜、創造の世界へ化したのは近代スキーの発現である。勿論、わが国では降雪地帯やその日数は全体からすれば僅かでしかない。しかしスキーの発展にともなって雪を通して自然を再発見した人を加えるならば、その数は莫大である。かつて牧之らが指摘した暖国の人の非情さはなく、地域を異にした人達が地域の社会と文化、人間のくらしかたの総体を真に深く理解しあえる端緒を開いたことも特筆されなければならない。しかしながら近年のスキー人口の飛躍的増大は新たな対応を求めていることも事実である。地域的、時期的限定のあるかぎり、スキーを通して自然との対応にも又限定があるのは当然である。伝統的スキーをもとにして、既存のスキー場で、もはや求めるところの自然は得られる状態ではないし、人間形成に最も有効に機能する場でもなくなっている。

われわれはスキーの「アンバランス性」を問題にするならば、大学スキーの新たな確立、取組みがなければならないと考える。

(1980. 5. 30 投稿)